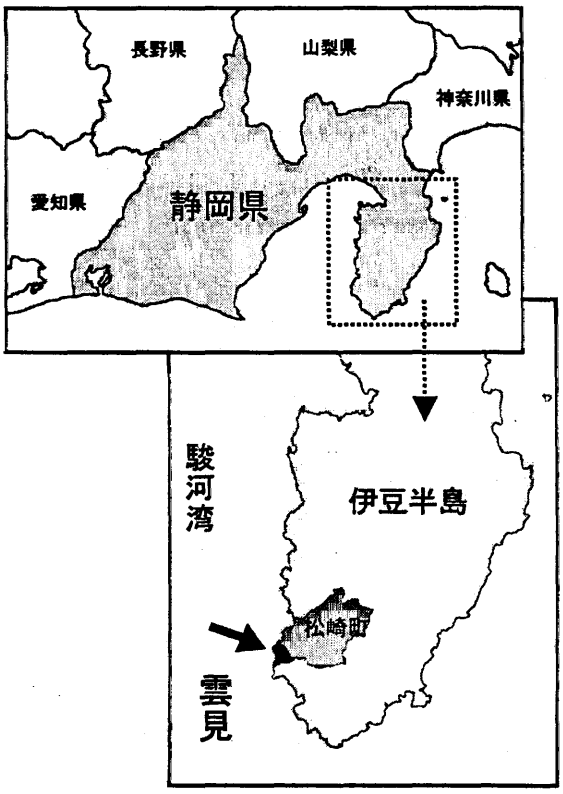
ブルーツーリズムに取り組んで

松崎町漁業協同組合雲見支所青壮年部
部　長　　高　橋　英　男

1．地域の概要

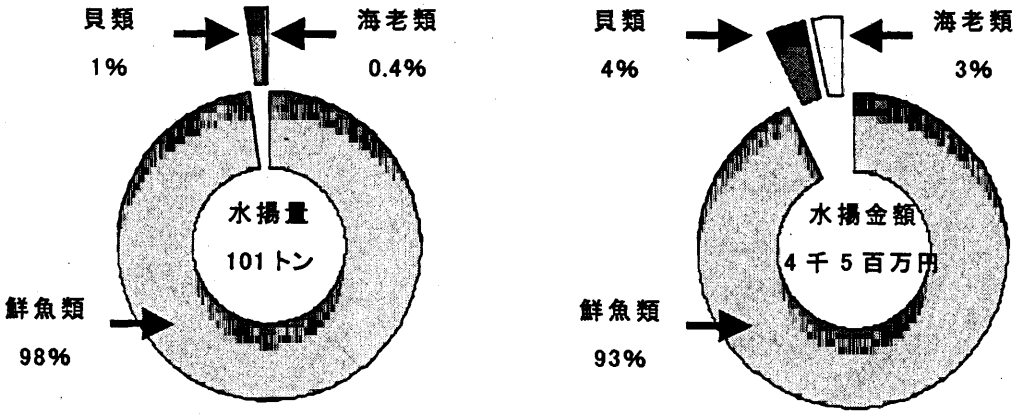
私達の住む町、松崎町雲見は伊豆半島西海岸の南西部に位置し（第１図）、西に駿河湾を望み好天には富士山を眺めることができる。雲見地区は古くから磯根を中心とした漁業が盛んであり、漁村として知られている。また、海岸線は変化に富み、背後には山々が控えるなど豊かな自然に囲まれ名所も多く、さらに温泉地としても知られていることから、観光も盛んな地区である。



第１図　松崎町雲見地区の位置

2．漁業の概要

松崎町漁業協同組合は、正組合員 365 名、準組合員 169 名からなり（平成 15 年末現在）、平成 15 年度の水揚量は 101 トン、水揚金額は４千５百万円となっている（第２図）。雲見地区の漁業の主体は採貝藻、刺網等の磯根漁業で、サザエ、天草、イセエビ等が主要な漁獲対象になっている。



第２図　松崎町漁協の品目別水揚量（左図）と水揚金額（右図）

3．研究グループの組織と運営

私達の所属する松崎町漁協雲見支所青壮年部は、昭和53年に結成され、現在は60歳未満の部員 15 名で構成されている。部員は主に採貝藻漁業や刺網漁業に従事しており、民宿を兼業している部員も多い。

青壮年部では結成以来、アワビ人工種苗の放流、イセエビの標識放流、サザエの資源管理、アワビ資源の増大を目的とした藻場造成、海底清掃などを実施してきた。また、昭和63年度、平成6年度および11年度には、県の推薦を得て全国青年・女性漁業者交流大会（実績発表大会）で発表を行っている。現在も活動内容は多岐にわたっており、年中行事として、海底清掃、サザエ密漁対策、刺網で漁獲された小型イセエビの再放流、マダイ稚魚の放流などを実施している（写真１、２）。

写真１ 雲見青壮年部とボランティアダイバーによる海底清掃

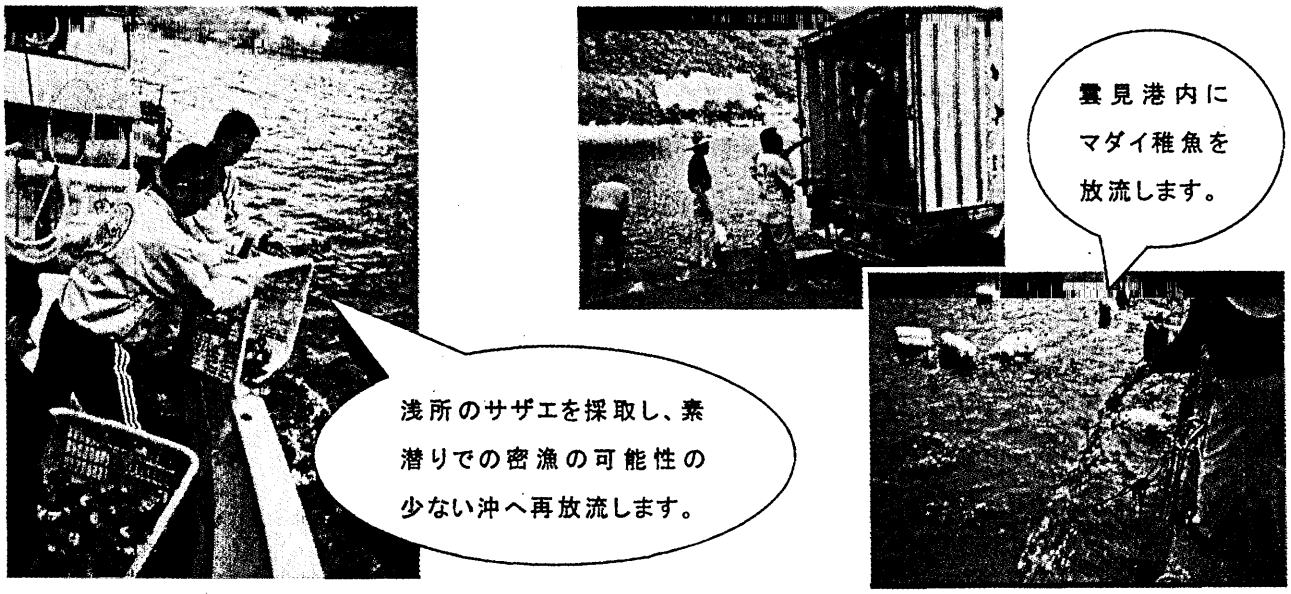


写真２ サザエ密漁対策（左写真）とマダイ稚魚放流（右写真）

4．研究・実践活動課題選定の動機

近年、漁獲量の減少や漁業従事者の高齢化、後継者問題など漁村の抱える問題は深刻化しており、雲見地区もまた例外ではない。地区の主力産業である漁業の衰退、さらには近年の不景気による観光客の減少も懸念されている。雲見地区の漁業と観光はまさに「活気」を失いつつある。

私達のこれまでの活動は、漁業者という自覚から「海の中のこと」が中心であった。しかし、地区の抱えている問題を考えると、より広い視野で活動しなければならないという思いが強くなり、部員からは「漁業と観光を上手く利用して、雲見地区をもっとアピールできないか？」という声も聞かれるようになった。そこで、青壮年部では漁業と観光の新しい可能性を探りながら、地区全体の振興・活性化に繋がるような活動として、ブルーツーリズムへの取り組みを模索し始めた。

5．研究・実践活動状況及び成果（効果）

ブルーツーリズムとは、近年の新しい観光形態の理念に基づいて考えられた造語であり、漁村の文化や歴史、自然、人々の生活などを観光資源として位置付け、来訪者（観光客）が漁村の良さを理解し楽しめるような余暇活動の総称である。ブルーツーリズムの特徴の一つに、従来型の観光に比べ来訪者と受入側の交流をより大切にすることが挙げられる。

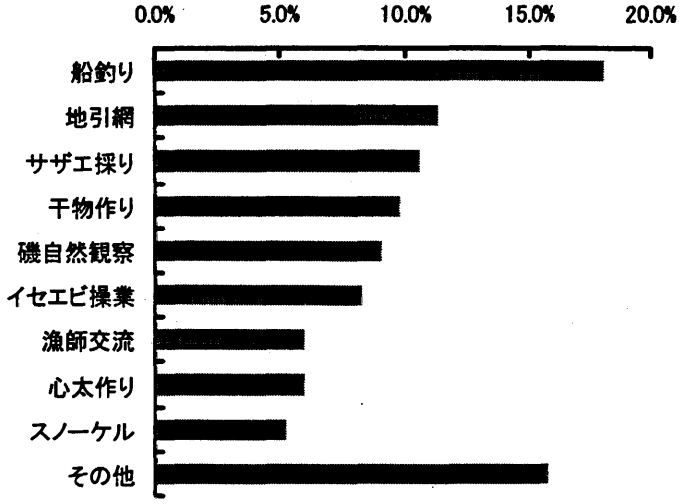
私達は、この漁業と観光を結びつけたブルーツーリズムに注目し、平成 13 年に部員を構成員とする松崎町漁協雲見青壮年部ブルーツーリズム研究会を発足させ、『雲見地区における海・漁業体験活動の取り組み』を課題とした。研究会のこれまでの活動状況を第１表に示した。

第1表　雲見青壮年部ブルーツーリズム研究会の活動状況

平成 13 年度	観光客を対象にブルーツーリズムに関するアンケートの実施
	ブルーツーリズムに関する研修会の開催
平成 14 年度	ブルーツーリズムの先進的事例の視察
	タッチプールの作製および設置
平成 15 年度	タッチプールの本稼働
	海藻押し葉作り勉強会の開催
平成 16 年度	雲見港岸壁の大掃除
	遊覧・船釣り体験の実施
	ナイトクルージングの実施
	宿泊施設での海藻押し葉作り体験の導入

平成 13 年度には、観光客を対象にブルーツーリズムに関するアンケートを実施し、観光客の体験活動へのニーズを把握するとともに、雲見地区に最適なメニューを検討した（第３図）。また、ブルーツーリズムに携わる講師を招いて研修会を開催し、青壮年部、松崎町役場、松崎町漁協、水産試験場らが参加のもと、ブルーツーリズムの先進的事例の運営状況や海・漁業体験活動の意義などについて意見を交わした。

平成 14 年度には、青壮年部でブルーツーリズムの先進的事例を視察し、実際に体験教室のプログラムを体験しながら教室の運営方法や講師（地元の漁業者）の指導技術、要領などを学んだ（第４図）。視察を行ったことで、部員のブルーツーリズムに対するイメージが明確化され、観光客に雲見地区の良さが伝わるような海・漁業体験活動プログラムの作成を進めた。その第１弾として、雲見港の船着場に観光客が磯の生物と触れ合えるタッチプールを設置した。タッチプールにはイセエビ刺網で混獲された魚やウニ、カニ、ヒトデ、海藻などを入れ、生物紹介用のパネルも設置した（写真３）。タッチプールは特に子供達に人気があり、釣り人やダイバーにも好評であった。



第３図　観光客の望む海・漁業体験活動
（アンケート調査結果一部抜粋　回答数 133）

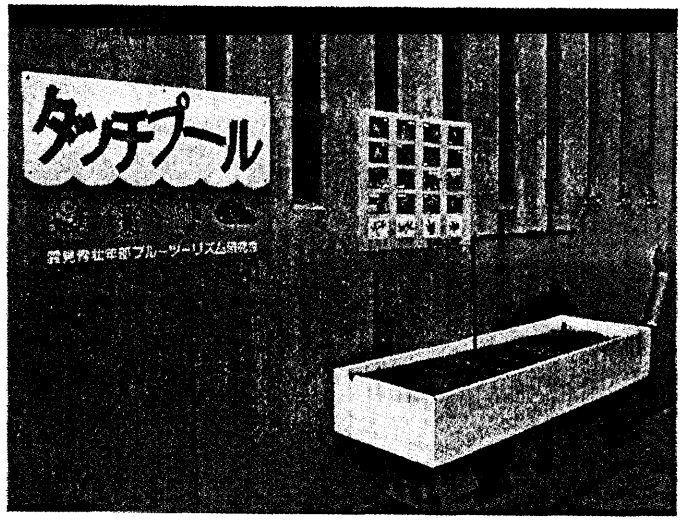
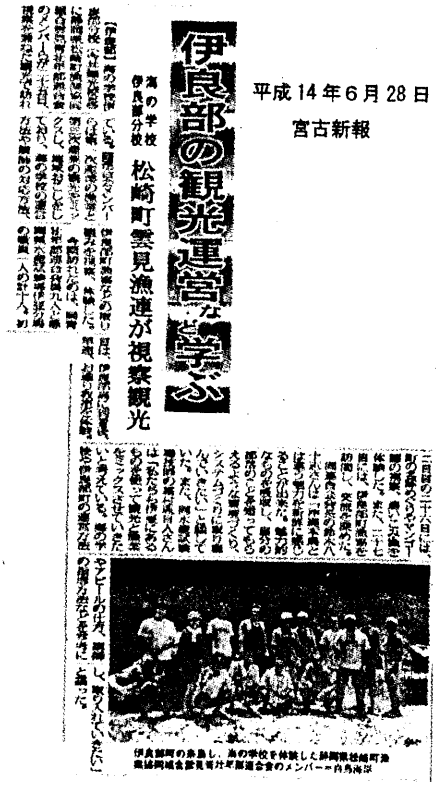


写真３　タッチプール



第４図　新聞掲載記事

平成 15 年度には、タッチプールを本稼働させ生物の確保とタッチプールの管理にあたった。また、雲見地区では様々な海藻がみられることから、青壮年部では海藻を新たな観光資源として位置付け、海藻押し葉作り勉強会を開催した。勉強会には青壮年部だけでなく、民宿の女将さん達にも積極的に参加してもらった（写真４）。勉強会では水産試験場の職員を講師に招き、押し葉に適した海藻の選び方や作成手順などを学んだ。女将さん達からは「思ったよりも簡単で、綺麗な作品ができる」、「観光客にも手軽に楽しんでもらえる」、「ぜひ宿に導入したい」などの意見があり、海藻押し葉作りはとても好評であった。

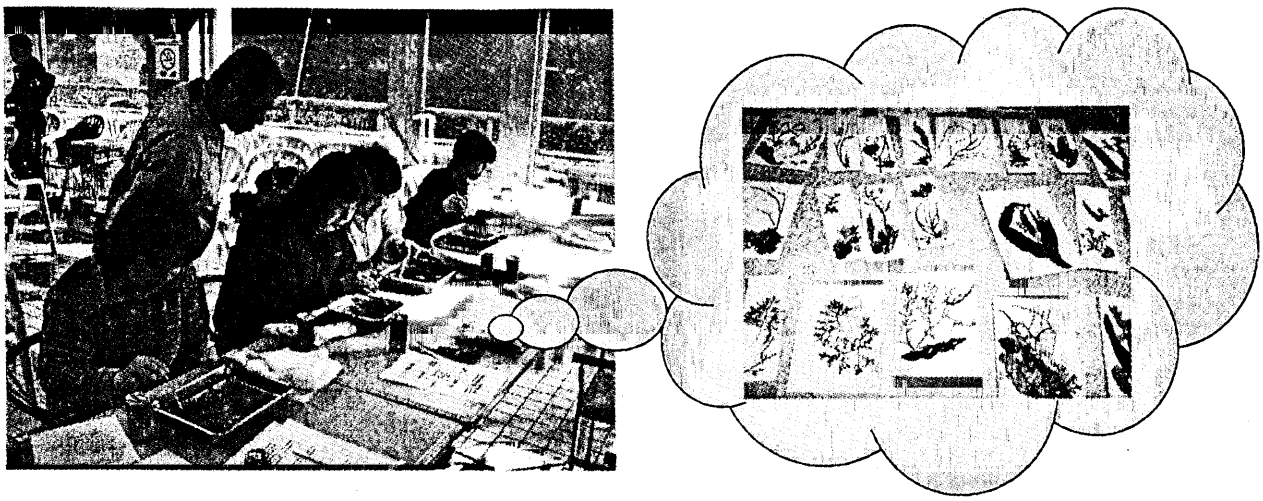


写真4　海藻押し葉作り勉強会

平成 16 年度には、民宿で宿泊客を対象とした海藻押し葉作り体験を導入してもらうべく、青壮年部の活動と海藻押し葉の作り方を紹介したパンフレットを作成し配布した。夏は子供連れの観光客も多く、夏休みの思い出に家族で海藻押し葉に挑戦する微笑ましい光景が見られた。

平成 16 年6月には、地域の協力を得て青壮年部主催の遊覧・船釣り体験を実施した。観光客 28 名の参加があり、参加者は部員の操縦する6隻の船に分乗し、雲見地区沿岸を遊覧後、港周辺で船釣りを体験した。遊覧では、部員が漁にまつわる話などをして参加者に漁業への理解を深めてもらった。また、参加者には実際に箱メガネを使って海中の様子を楽しんでもらった（写真5）。船釣りでは、釣りをしたことのない参加者も多く、部員がコツを教えながら釣りの雰囲気と景色を楽しんでもらった（写真6）。体験終了後、陸では味噌汁のサービスを設け、青壮年部と参加者との交流を図るとともに、アンケートを実施した（写真7）。参加者からは「海から見た陸の景色が素晴らしい」、「地元の人と話ができて良かった」、「地元の人の温かい心が伝わってきて良い旅行になった」、「雲見にまた来たい」など私達の活動の励みとなるような声が寄せられ、漁とは一味違った充実感を部員全員で分かち合った。

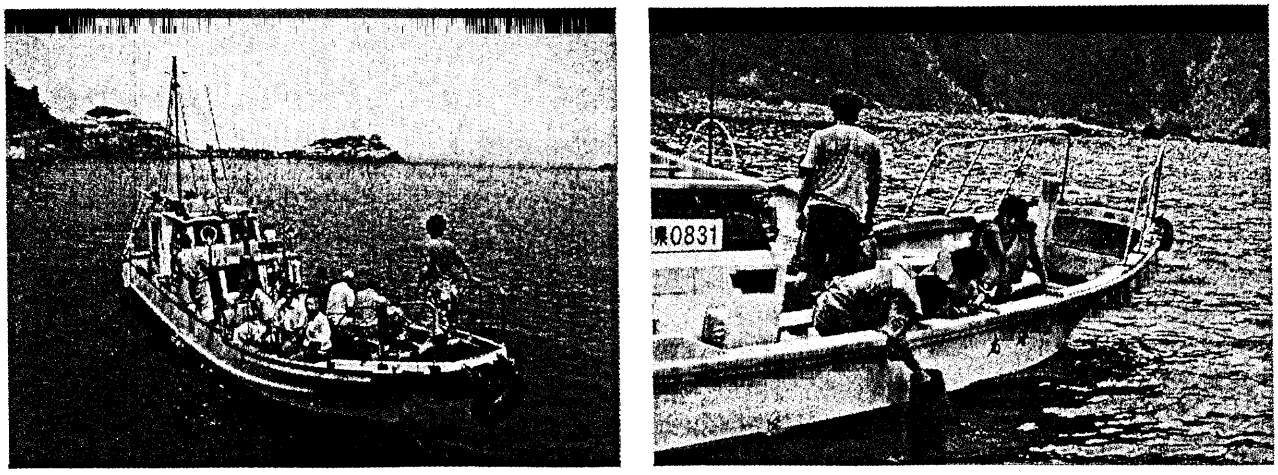


写真5　遊覧・船釣り体験（右写真：遊覧での箱メガネ体験）

写真6　船釣り体験も大好評！！

写真7　体験終了後は青壮年部と参加者全員で交流を深めた。

9月にはナイトクルージングを実施した（第5図）。観光客24名の参加があり、参加者は部員の操縦する2隻の船に分乗して夜の雲見港内を周遊した。参加者には船の光に誘われたトビウオやイワシ、アナゴ、ヒラメなどを観察してもらいながら、普段は体験することのできない夜の海の雰囲気を存分に楽しんでもらった（写真8）。部員による魚の生態説明はとても好評であり、青壮年部と参加者との交流も深めることができた。参加者からは「トビウオが飛ぶのを初めて見た」、「このような活動を続けているのであれば、たくさんの人に体験してもらいたい」、「船に乗れること自体が貴重な体験であり、しかも夜の海という素晴らしい経験ができた」、「また参加したい」など嬉しいかぎりの声が寄せられた。

ブルーツーリズムへの取り組みをきっかけに、改めて青壮年部の存在意義を認識した部員も多かった。また、新しい目標に部員全員で取り組むことにより、一人一人の意識と責任感が強まり、その結果体験活動の質も良いものとなった。観光客と和やかな交流ができ、さらには「雲見にまた来たい」という声も聞くことができて部員一同手応えを感じている。

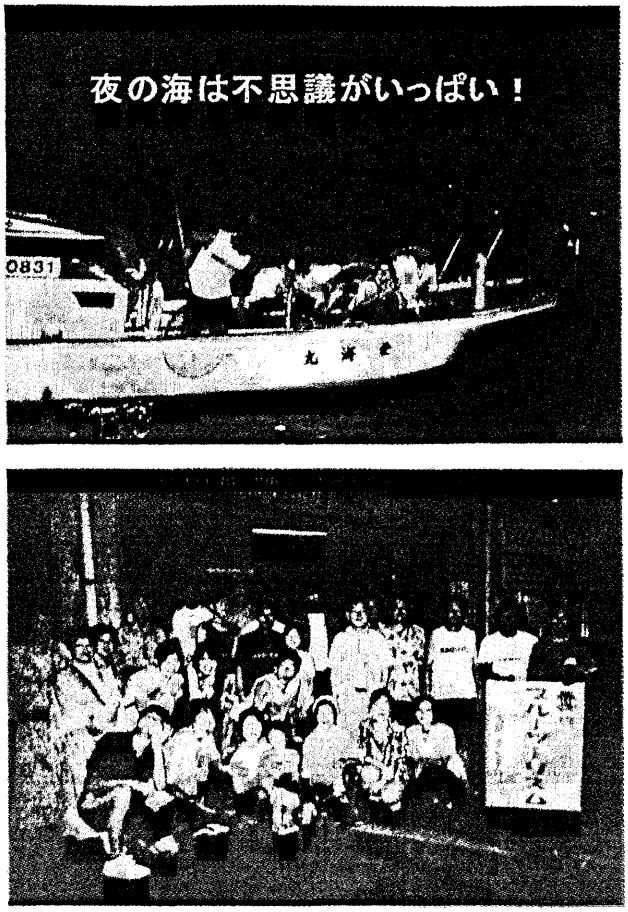


写真8　ナイトクルーズ

ナイトクルージングを楽しむ宿泊客＝松崎町雲見で

ナイトクルーズ模索

ブルーツーリズム　宿泊客24人を案内

漁業と観光結びつけ

松崎町漁協青壮年部雲見支所

平成16年9月16日

伊豆新聞

第5図　新聞掲載記事

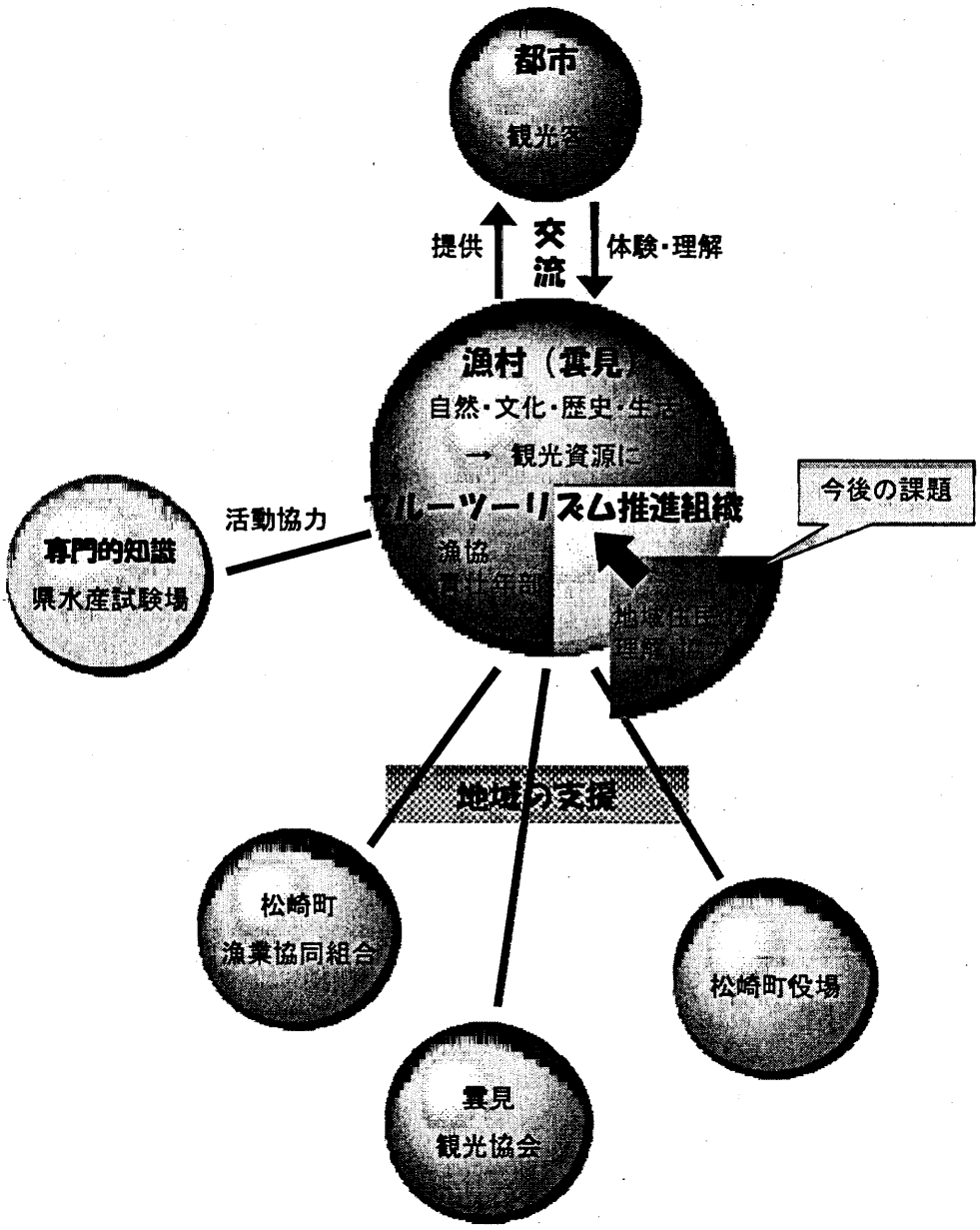
6．波及効果

私達のブルーツーリズムへの取り組みは、まだ実践段階に入ったばかりであるが、体験活動の参加者から「また企画してほしい」という要望が挙がっており、アンケート結果からもリピーターや口コミ効果が十分に期待できる。また、マスコミの取材を上手く活用することにより、雲見地区をアピールすることもできた。そして、何よりの収獲は部員一人一人が「地域のために何か行動を起こさなければ」という強い意思を持って取り組んでくれたことである。今回のような新しい試みには部員達の積極的な姿勢が必要不可欠であったことは言うまでもなく、今後は推進体制を強化しつつ、地元住民の理解も得て地区一丸となって取り組みたいと考えている（第6図）。

7．今後の課題や計画と問題点

青壮年部では、雲見地区に「活気」を取り戻すべく、地域の理解・協力を得ながらブルーツーリズムの導入を進めていきたいと考えている。特に、遊覧や船釣りなどの体験活動は夏過ぎのシーズンオフ対策として期待が持てるため、内容の充実を図るとともに実施回数を増やすことも検討している。また、「地元の海は自らの手で守っていく」ことを絶えず意識し、これまで活動の中心であった海底清掃やサザエ密漁対策、刺網で漁獲された小型イセエビの再放流、マダイ稚魚の放流なども継続していく。

今後も、雲見地区の現状をどのように改善すれば地区全体の振興・活性化に繋がるのか私達自身に日々問いかけ、恵みをもたらしてくれるこの美しい自然や豊かな海に感謝しながら、今の私達にできることを部員一同がんばっていきたい。



第6図　雲見地区におけるブルーツーリズムの推進体制